

高等学校

平成 9 年 度

教育研究員研究報告書

国 語

東京都教育委員会

平成 9 年度

《国 語》

教 育 研 究 員 名 簿

学 区	学 校 名	氏 名
1	都 立 一 橋 高 等 学 校	濱 方 由 紀
1	都 立 港 工 業 高 等 学 校	橋 とよみ
2	都 立 松 原 高 等 学 校	大 石 眞 二
2	都 立 烏 山 工 業 高 等 学 校	宮 田 美 和
3	都 立 大 泉 高 等 学 校	武 田 康 宏
3	都 立 鷺 宮 高 等 学 校	藪 田 憲 正
3	都 立 桜 水 商 業 高 等 学 校	近 衛 啓 子
6	都 立 葛 西 工 業 高 等 学 校	川 野 芙 美
7	都 立 南 多 摩 高 等 学 校	酒 井 晃 子
7	都 立 片 倉 高 等 学 校	石 井 哲 也
8	都 立 武 蔵 村 山 東 高 等 学 校	堀 米 陽 子
10	都 立 調 布 南 高 等 学 校	竹 島 千 春

担 当

教育庁指導部高等学校教育指導課 主任指導主事 大 澤 充 二
指導主事 守 屋 一 幸

— 研 究 主 題 —

言語により豊かに自己を表現する力を育てる指導の在り方

目 次

I	主題設定の理由	2
II	主題解明の方法	3
III	指導の実際	6
1	「付箋ディベート」により，豊かに自己を表現する力を育てる 指導の工夫	6
2	小説の読解指導との関連で，豊かに自己を表現する力を育てる 指導の工夫	12
3	古典の学習を通して，豊かに自己を表現する力を育てる 指導の工夫	18
IV	まとめと今後の課題	24

言語により豊かに自己を表現する力を育てる指導の在り方

I 主題設定の理由

21世紀を目前にひかえ、社会は急激な変貌を遂げつつある。情報化、国際化はますます進展し、他者とコミュニケーションを図る能力は今まで以上に求められるようになって考えられる。中でも、自分の思いや考えを他者に伝える力は欠くことのできないものである。

ところが、近年、買い物などの日常生活におけるコミュニケーションの場の減少や家庭における会話の機会の減少など、互いの意思疎通の機会はますます少なくなってきている。社会全体として人間関係の希薄化が進む中で、日常の生活において自分の思いや考えを豊かに表現する機会は極めて減少していると考えられる。このため、日常の言語生活の中だけでは豊かに自己を表現する力が育ちにくい状況がある。

高校生の日常会話においても、「かわいい」「むかつく」など、自分の思いや考えを単純化し、豊かとは言い難い画一的な言葉で表現しようとする現象が見られる。こうしたことは、語彙やコミュニケーションの場の不足からくる自分の表現力への自信のなさや、表現の仕方を工夫しても伝わる内容に大差ないのではないかという、言語への信頼感の不足などに起因するものと考えられる。さらに、受け手の側も単純化された表現だけで相手の思いや考えを十分に理解できたと思いついてしまう場合も多い。高校生の中で流行している「ポケベル」やシール写真の交換は、たわいもないメッセージを日に何度も交わし合ったり、友達と一緒に撮った写真を共有したりすることで、希薄な人間関係を補おうとする新しいコミュニケーションの手段であるとも考えられる。

このような状況にあって、学習指導要領は、表現指導の充実、特に自分の思いや考えをまとめて表現することの重要性をその骨子に示し、第15期中央教育審議会第一次答申は、表現力の育成にかかわる能力として、いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていく力や、自分に本当に必要な情報を選択し主体的に自らの考えを築き上げていく力の育成を掲げている。また、これらを受けた教育課程審議会「中間まとめ」（平成9年11月）では、自分の考えをもって、筋道立てて表現する力の必要性が述べられている。

言語により自己を表現する力を育てることは、言うまでもなく国語科の重要な課題である。しかし、国語科の授業においては、依然として読むことの指導に重点が置かれる傾向があり、表現力育成の指導は十分であるとは言えない。自己を表現する機会を意図的に設定しても、スピーチや作文といった表現活動はもちろん、授業中の発言にさえも大きな抵抗感をもつ生徒が多いのが実情である。また、表現指導を行う際にも、指導内容や方法が確立されていないために、十分な効果を上げられない状況がある。本研究で実施した実態調査においても、大半の教員が表現力の育成について重要だと考えながら、時間をかけた十分な指導は不足していると認識している状況がうかがえる。そこで本研究においては、「言語により豊かに自己を表現する力を育てる指導の在り方」を研究主題として設定した。

「言語により」としたのは、複雑な事柄や抽象的な概念の伝達や認識を行う手段として、言語が最も有効であるからにほかならないが、言語そのものや言語によって創造された文化に目を向けることによって、生徒に言語の力を再認識させ、言語への信頼感を回復させるね

らいがあるからである。また、「言語により」とは、文字言語・音声言語の限定をせず、自分にとって表現しやすい方法を選択させることも意図している。「豊かに表現する」ことについては、まず表現の内容として、一人一人によって更には対象によって異なるそれぞれの思いや考えが十分に表れていること、そして、それが思考力や想像力、言語感覚を十分に働かせて作り出したものであることが重要である。次に表現の方法として、語の選択や構成の仕方など、相手に適切に伝える工夫をすること、相手の立場や考え、受け取り方に配慮した表現をすることも必要である。すなわち、物事に不快や反発を感じた場合、それを「むかつく」などの一語ではなく、何のどのような点に対して自分はどのように思い考えたのかという内容を、相手が的確に理解できるように表現の方法を工夫して伝えることが、「豊かに表現する」ということである。「自己」とは、表現の主体となるものであり、表現するための内容をもつ存在である。しかし、「自己を表現する」際に、自己のすべてを表出することは不可能である。そこで本研究においては、表現の対象となる自己を、ある事物に対したときの自分の思いや考えとしてとらえることとした。それらは感動や共感であったり、疑問や反発であったりするが、そこには自分の生きてきた経験や価値観が反映されると考える。

II 主題解明の方法

本研究においては、標記の主題を解明するために、生徒の表現の特色や表現にかかわる授業実態と教師の意識調査を行った。その結果、多くの教師が生徒の自己を表現する力の不足を実感しているながらも、人数や時間の制約から表現にかかわる授業ができないという問題意識をもっていることが分かった。また親しい友達同士の会話には抵抗を感じないが、授業中の発言や見知らぬ人との会話、文字言語による表現に抵抗を感じているという生徒の実態も明らかになった。生徒が自己を表現しようとする際の問題点は次のようにまとめられる。①表現すべき内容が見つからない。②表現したくなる場面が少ない。③表現方法が分からない。④言語への信頼感や表現活動に対する自信がない、の4点である。

①「表現すべき内容が見つからない」のは、生徒には自己を表現するとは、どのようなことか分からないことが原因だと考えられる。そこで本研究においては、自己を表現することを事物に対したときの自分の思いや考えを表出することとし、その対象として他者の話や文章などを提示することにした。②「表現したくなる場面が少ない」のは、表現する必然性を感じる機会が少ないということである。これは生徒自身が表面的なやりとりでコミュニケーションが成立していると思い込んでいることや、他者との意見の摩擦を避ける傾向などが原因であると考えられる。そこで本研究では、生徒の疑問や反発に着目し、自分の思いや考えを表現したくなるような学習活動を設定した。③「表現方法が分からない」のは、語の選択や構成の仕方、相手に配慮をした表現方法が分からないということと、教師の表現方法の指示が個々の能力や特性に必ずしも対応していないためだと考えられる。そのために、多様な表現方法を提示し、生徒が自分に合った表現方法を選択できるように指導方法を工夫することにした。④「言語への信頼感や表現活動に対する自信がない」のは、言語によって自己を表現する体験が乏しいため、言葉の力を実感しておらず、また自己を表現したときの他者からの否定的評価の積み重ねによって、自分の表現に自信がもてないからだと考えられる。そ

ここで、学習活動を段階的に設定し、一人一人が豊かに自己を表現できるようになる過程を実感できる指導方法を工夫した。また、学習活動の各段階において、肯定的評価をするよう指導計画を立案した。

以上のような学習指導の意図を実現するため、本研究においては、「1『付箋ディベート』により、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫」、「2 小説の読解指導との関連で、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫」、「3 古典の学習を通して、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫」の三つの指導法について研究授業とその分析を行った。なお、各指導法とも3～5校で研究授業を行い、その都度、指導内容・方法に改善を加えるとともに、生徒や学校の実態に応じて教材や指導方法を工夫していった。

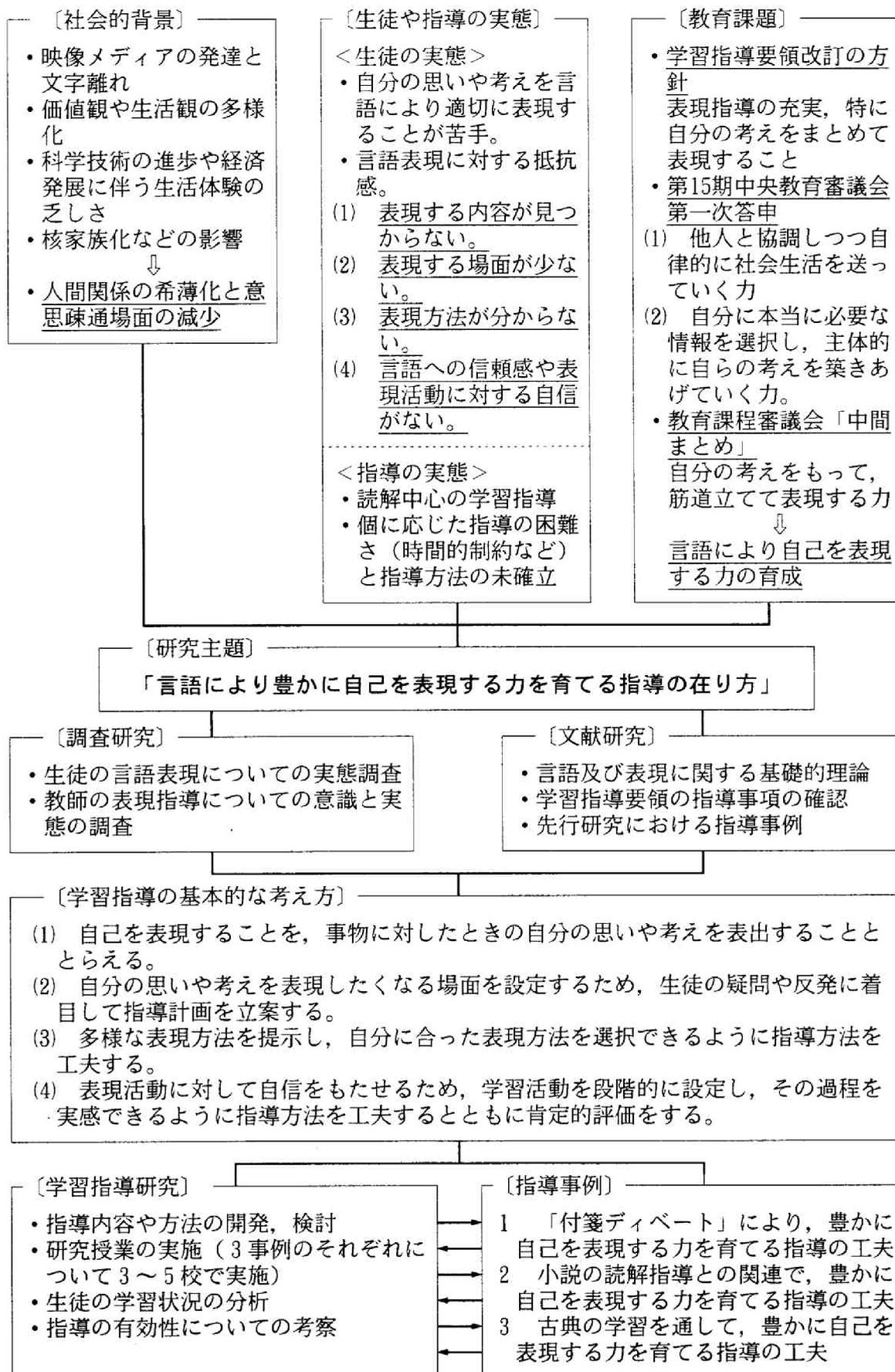
「1『付箋ディベート』により、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫」では、新聞記事を教材として、自分の思いや考えを表現するために必要な情報を収集整理し分析する力を養うとともに、他者の疑問や反論を知り、それに答えながら自分の思いや考えを適切に伝えていく力の育成を目指した。生徒がそれぞれの興味・関心に応じて選んだ記事を教材とし、「付箋ディベート」の学習活動を設定することにより、生徒一人一人が主体的に課題に取り組むことができるようにした。「付箋ディベート」では、グループ内で互いに質問や反論とそれに対する回答を交わす中で、自分の思いや考えを具体化したり深めたりして表現する学習活動を通して、「言語により豊かに自己を表現する力」の育成を目指した。また、発表の方法についても文字言語、音声言語の限定をせず、意見文とスピーチとから生徒が自分に合った表現方法を選択できるようにした。

「2 小説の読解指導との関連で、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫」では、青年期特有の悩みに直面する登場人物の心理的葛藤を描いた『春愁』を取り上げた。『春愁』は登場人物の立場や考えが明確に表現されているため、生徒がそれぞれの立場から登場人物への共感や疑問、反発をもって自分の思いや考えを表現しやすい教材である。本単元では、まず登場人物の立場や言動を想像し、次に同じ状況に置かれた自分について考えるという段階を経て、登場人物との対比から自己を見直して表現する学習活動を設定した。また、ロールプレイングや手紙など、生徒が様々な表現方法を体験できるよう指導計画を立案した。

「3 古典の学習を通して、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫」では、和歌を教材とし、和歌の作者や他の生徒との対比によって、自分の思いや考えを深めて表現することを目標とした。具体的には、まず十数首の和歌を提示し、その中から各自一首選び、辞書を用いた意味調べを基に、想像力を働かせて和歌の背景や心情を読み取って表現したものをグループ内で発表し合った。その際、口語訳を行わず、和歌から直接想像をふくらませることとした。次に和歌の学習を通じて見つめ直した自己の思いや考え、体験を「私の作品」として文章または詩歌により表現し、これを基にポスターセッションを行って、互いの考えを交換し合う学習活動を設定した。

なお、指導計画の立案に当たって、音声言語による表現の指導については、東京都立教育研究所国語研究室「音声言語による表現力に関する研究—児童・生徒の話すことの高める学習指導—」を、文学的文章の読解指導については、同研究室「文字言語による理解力に関する研究—文章の叙述に即して豊かに想像する力を育てる学習指導—」を参考にした。

資料「研究の構想の概要」



Ⅲ 学習指導の実際

1 「付箋ディベート」により、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫

1. 単元名 「付箋ディベート」で、自分の意見を組み立てて表現する。（「国語Ⅰ」、
「国語Ⅱ」、
「国語表現」） *研究授業は、第Ⅰ学年「国語Ⅰ」で実施。

2. 教材 生徒がそれぞれの興味・関心に応じて選んだ新聞記事

3. 単元の目標

- ① 自分の思いや考えが相手に的確に伝わるように工夫して表現しようとする。
- ② 相手に応じて表現を工夫し、自分の思いや考えを適切に伝えることができる。
- ③ 見出しやリード文を活用して新聞記事を選択し、内容を的確に読みとることができる。
- ④ 表現の内容や方法に応じた語や語句の選択、構成の工夫などを行うことができる。

4. 単元設定の理由

様々な情報が氾濫する現在、必要な情報を選択、判断する力が必要とされている。また社会において、相互の理解を深め、他者と協調しつつ主体的に生きていくためには、言語により自己を表現することが不可欠である。

しかし、現代の高校生は、社会の中で生きているという認識は弱く、友人とのつながりを重視し、かかわろうとする情報も友人とのつながりのためのものであるように感じられる。友人との関係においては、同調することでそのつながりが保たれ、自らの思いや考えを言語により表現する場面は少ないようである。言語により自己を表現しようとする積極性に欠けるのは、言語により表現する力が乏しいことや、表現すべき内容が何であるのかよく分からないことがあろう。また、自己の思いや考えがあっても、それを自分で組み立てて表現することができないこともあろう。

そこで本単元においては、他者から質問を受けてそれに答えるという形をとりながら、自分の思いや考えを意見として、相手に分かりやすいように組み立てていく学習活動を設定した。新聞を教材としたのは、情報を収集整理し、分析する力を養うために適切な教材であるとともに、社会と自己とのつながりを認識させうる教材だと考えたからである。必要な情報や興味・関心のある情報を選び、それを正しく取り入れていくことは、表現すべき内容をさまざまに蓄積することにもなる。また自らが疑問や興味・関心を感じたものを取り上げることが、自分の思いや考えを表現しようという意欲を喚起することにつながると考え、各自が題材を選択することとした。表現の形式としてスピーチや意見文など各自が表現しやすい形式を選ぶことにしたのも、表現したいという意欲を尊重し、どの形式が自己を表現するのにふさわしいかを考えさせるためである。

他者を尊重しながら、自分の思いや考えを他者に理解してもらうように適切に表現する態度と能力を養うことが本単元の目標である。音声言語、文字言語のいずれにおいても自己を相手に理解してもらえる表現力を培うとともに、相手に理解してもらえた時の達成感から、表現活動に対する自信を育てたい。社会の中で生きていることを再確認し、自ら課題を見つけ、それとかわる中で自己を見つめることが、豊かに自己を表現する力を育てることにつながると思う。

5. 主な学習活動の概要（5時間扱い）

(1) 第1次（1時間）

- ア 新聞を読み、各自が疑問や反発、興味・関心をもった記事などを選ぶ。
- イ ワークシートに記事を貼り、選んだ理由や思ったこと、考えたことを簡単に書く。

(2) 第2次（3時間）

- ① できるだけ違う題材を選んだ生徒同士のグループ（4～5名）を編成し、「付箋ディベート」を行う。【本時 2/5】
 - ア 前時のワークシートをグループ内で回覧し、質問や反論などを付箋紙に書き込んで相手のワークシートに貼り合う。
 - イ 自分のワークシートに貼られた付箋紙の質問や反論に対する回答や補足説明を付箋紙に書いて貼る。質問や反論の内容が分からない場合には、口頭で確認する。
 - ウ 回答や補足説明の内容についても付箋紙による意見の交換を行い内容を深める。
- ② スピーチと意見文とから表現形式を選び、メモと原稿を作成する。
 - ア 前時のワークシートに貼られた付箋紙を、構成を考えて並べ替えたり書き足したりして、スピーチメモまたは意見文の構想メモを作成する。
 - イ スピーチは2分間程度、意見文は、400～600字程度に意見をまとめる。
- ③ グループ内で2分間スピーチと意見文の発表を行う。
 - ア グループ内でスピーチと意見文の発表を行い、スピーチは録音しておく。
 - イ 付箋紙にアドバイスを書き込んで、互いのワークシートに貼る。

(3) 第3次（1時間）

- ア 他の生徒の参考になるスピーチと意見文を全体に紹介する。
- イ これまでの学習活動で感じたことや気付いたことをワークシートに記入する。

6. 指導の工夫

(1) 「付箋ディベート」の学習活動を設定した。

ディベートの「立論」に対する質疑（「反対尋問」）や「反駁」に相当する質問や反論を付箋紙に書いてワークシートに貼り、その回答や補足説明も付箋紙に書いて回覧していく学習活動を「付箋ディベート」として生徒に提示した。「付箋ディベート」では、最初に書かれた感想・意見（「立論」に相当）が、「おもしろい。」などの一語文であっても、相手からの質問や反論に回答していく過程で必然的に内容を具体化したり深めたりしていくことになる。また、口頭でなく付箋紙に書き込むことで、生徒は、内容を相手に分かりやすいものにしていく過程を視覚的にとらえることができる。

(2) 「付箋ディベート」の付箋紙を、そのままスピーチメモや意見文の構想メモとした。

この方法では、付箋紙を何度も並び替えられるので、生徒は、質問や反論への対応、意見と根拠との関係などを考えながら、適切な構成を練り上げていくことができる。なお、生徒の実態によって、構成の仕方を例示したり最初の一文や結論の部分について助言したりすることが必要である。

(3) 生徒が自分で表現方法を選択できるよう指導計画を作成した。

スピーチ（音声言語による表現）と意見文（文字言語による表現）とから生徒が自分に合った表現方法を選べるようにした。

7. 本時の指導 (2 / 5)

(1) 本時のねらい

- ① 他者の思いや考えを尊重しながら、質問、反論、回答などを互いに提示し合うことができる。
- ② 他者との意見交換を通して、自分の思いや考えを深めて表現することができる。

(2) 本時の学習の流れ

主な学習の流れ (□教師, □生徒)	教師の指導・援助 (○留意点, ◆評価)
<p>1 質問や反論の仕方など、「付箋ディベート」の方法を全体に例示する。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">自分の思いや考えを相手に分かりやすいように説明しよう。</p> <p>2 ワークシートを回覧し、質問や反論などを付箋紙に書いて貼り合う。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>3 ワークシートに貼られた付箋紙の質問や反論などに対する回答や補足説明を別の付箋紙に書き込む。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>4 回答や補足説明についても、上記の2, 3と同様の学習活動を行う。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>5 まとめと次時の予告 ワークシートに貼られた付箋紙を整理し、自分の思いや考えをスピーチか意見文にすることを予告する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「おもしろかった。」など、短い感想・意見とその記事の見出しを提示し、「おもしろい」内容を説明するためには、何を知りたいかを考えさせる。 ○ 回覧されたワークシート1枚に対して必ず1枚以上の付箋紙を貼るよう指示する。 ◆ 質問が細部にこだわり過ぎたり当たりさわりのないものになったりしていないか。 ○ 机間指導をし、「付箋ディベート」が活発に行われるように適宜助言する。 ○ 必要に応じて、教師が付箋紙を貼る。 ◆ 自分なりに回答や説明を考えて書き込んでいるか。 ○ 適切な質問と回答を全体に紹介する。 ○ 2回目は、付箋紙の色を変える。 ○ 自分の体験や知識などに基づく質問や回答も記入するよう助言する。

(3) 評価の観点

- ① 他者の思いや考えを尊重しながら、質問、反論、回答などを互いに提示し合うことができたか。
- ② 質問や反論に対して、自分の体験や価値観などから回答や説明を考えだしているか。

8. 生徒の学習状況

本単元では、生徒各自が選択した新聞記事について、グループ内で「付箋ディベート」を行った。この活動を通して、生徒は、曖昧だった自分の考えをはっきりとさせていったり、記事の内容を違う視点から考え直したりして、自分の考えをスピーチや意見文にまとめることができるようになっていった。

(1) 生徒Aの事例

Aは、題材として、「二輪車も 100キロOK!? 高速道路の速度見直し検討へ 警察庁」という見出しの記事を選んだ。現在、高速道路で最高速度が80km/hに制限され、トラックなどと同じ走行車線を走ることが多い二輪車の制限速度を 100km/hに引き上げるという内容の記事である。Aはグループでの「付箋ディベート」の後、二輪車専用レーンを高速道路につくるべきだというスピーチをした。他者の意見をよく取り入れ、それを土台にしてさらに独自のアイデアを思いつき、グループの生徒の理解を得た。スピーチも、メモを活用しながら聞き手を見てゆっくりと話し、分かりやすいものであった。

生徒Aのワークシートの内容	質問や反論など	分析
①「記事を選んだ理由」 興味があって選んだ。		
②「感想・意見」 見直しは必要ない。	・記事と①②を読んだ後の質問や反論	・Aは意見のみを一文で書いている。
③ 付箋紙に書いた回答 ア' 80km/hを守っていないのだから 100km/hにしたらよけい危ない。	ア なぜ見直しは必要ないのか分からない。	・理由を付け加えて回答している。
イ' 100km/hにしても二輪車の運転手が気をつければ、事故は防げるかも知れない。	イ 同じ車線を走るトラックなどとの事故が多いので、見直しをしたほうがいい。	・イの意見を通して肯定的になってきた。
ウ' 速度以外のこともあると思った。	ウ さっきと違う。 エ 速度以外のことは？	・質問に対応して、独自のアイデアを提示している。
エ' 運転手が気をつけるとか、速度を見直して専用レーンを作るとかすると安全になる。	オ 二輪車専用レーンは、よい考えだと思う。	
<スピーチの一部> 速度の見直しだけをしたところで、今度は時速 100km以上で走る人がでてくると思います。速度だけを見直すのではなく、二輪車専用の車線を作るなど、他の案も考えるべきだと思います。		

(2) 生徒Bの事例

Bは、題材として、8月に事故死した英国元皇太子妃に関する記事を選んだ。この記事は「品位」という言葉がキーワードになっており、元皇太子妃の生き方やマスコミの品位について述べられているものであった。Bは、グループ内で意見を交換する中で、自分の考えをより具体的なものとしていき、その考えを意見文として表現することができた。

生徒Bのワークシートの内容	質問や反論など	分析
<p>①「記事を選んだ理由」</p> <p>最近のニュースの中では一番話題になっていると思ったから。</p> <p>②「感想」</p> <p>この記事は「地雷原を歩く」ということで「品位」のある生き方をしたと言うが、僕も「地雷原を歩く」ということではない別の何かで「品位」のある生き方ができたらいいなと思った。</p> <p>③ 付箋紙に回答</p> <p>ア' 例えば、電車の中でお年寄りに席を譲ったりとか。</p> <p>イ' その人のもっている価値のある生き方。</p> <p>ウ' 世界中の人が楽しく暮らせるよう社会の役に立っていきたくと思う。</p> <p><意見文の抜粋></p> <p>「品位」ある生き方とは、その人のもっている価値のある生き方だと思う。僕は、電車の中でお年寄りに席を譲ったり、どんなささいなことでも人の役に立つような価値のある生き方をしたいと思う。</p>	<p>・記事と①②を読んで</p> <p>ア 「地雷原を歩く」ということでない別の何かとは？</p> <p>イ 「品位」のある生き方とは？</p> <p>ウ B君は、どんな価値をもって生きていきたいですか？</p>	<p>・「品位」という言葉を曖昧にとらえ、記事中の言葉を抜き出してそのまま「品位ある」生き方ができたらと書いている。</p> <p>・自分にできる身近なことを考えた。</p> <p>・「品位」という言葉について詳しく考え、分かりやすい表現に直している。</p> <p>・グループの生徒の質問から、自分がどのような生き方をしていきたいのか考えている。</p> <p>・付箋紙を構想メモとして左のように意見文に表現した。「品位」ある生き方とはどういうものかを自分なりに理解し直し、自己の生き方に結びつけて表現している。</p>

9. 考 察

本単元では、自分の思いや考えを他者によく分かるように適切に表現する能力を養うことを目指し、グループ内で付箋紙を用いて意見交換する「付箋ディベート」の学習活動を設定した。この学習活動を通して、「おもしろい。」などの一語文で感想を書いていた生徒や自分の考えが曖昧だった生徒が、自分の考えをはっきりとさせていったり記事の内容を違う視

点から考え直したりして、自分の思いや考えをスピーチや意見文にまとめることができるようになっていった。他者に質問や反論などを書いてもらい、それに対して回答することで、生徒は自分の意見を具体化したり深めたりができるようになったものと思われる。

この「付箋ディベート」では、クラス全体の中では発言をあまりしない生徒も、活発に意見交換を行っていた。また、グループの生徒がもつ自分と異なる思いや考えに気付き、それを踏まえた上で自分の思いや考えを相手に理解してもらおうとする姿や、他の生徒に安易に同調するのではなく、相手の思いや考えを知った上で、自分の意見を主張しようとする姿勢も見られるようになった。

「付箋ディベート」が話し合いではなく書くことを主とした活動であったことで、生徒は自分や相手の考えを客観的にとらえることができたものと思われる。また、付箋紙をワークシートに整理したものをそのまま構想メモとしたことは、スピーチや意見文の構成を考える際に、意見と根拠の組合せ、反対論を踏まえた論の展開などを容易にしていた。

事後の感想文からも「他人と意見を交換し合うことで、自分でも思いもしないような意見が出てきたり新しい発見があったりして、とてもおもしろいなと思いました。」「友達の意見を聞け、友達を選んだ記事を読めたのが楽しかった。」「最初はその記事に対して何も思わなかったけれど、意見の出し合いをしているうちにいろいろな考えが浮かんできた。」など、楽しんで学習に取り組んでいる生徒の様子がうかがえた。

「付箋ディベート」が活発に行われるためには、方法を丹念に説明する必要ある。生徒がどの時点で何を付箋紙に書けばよいのかを、一つ一つ例示しながら段階的に説明していくことが有効であった。また活発に意見交換が行われていないグループには教師が付箋紙を貼ったり助言を与えたりしながら、きっかけを作ることも必要である。自分の体験や価値観に基づく意見を付箋紙に書き入れるように助言すると、自分の思いや考えを表現することにつながりやすかった。「あなたならどうか？」などの付箋紙を貼り、それに対して答えさせ、その部分をスピーチや意見文の終わりに持ってくるように指示すると、生徒は自分の考えを組み立てやすいようである。

本單元における評価は、毎時間後、教師がワークシートを見て、意見交換がうまくいっていないグループにはその都度助言や質問の付箋紙を貼ったり、うまくいっているグループの内容を全体に紹介したりすることで行った。発表したスピーチや意見文の内容よりも、自分の考えの深まりや他者を尊重しながら意見交換をするプロセスを肯定的に評価することで、生徒が意欲的に学習に取り組めるようになったと考える。また、質問や反論、感想や助言などを互いに交換する学習活動がそのまま相互評価として有効に機能していたことが、生徒の感想からもうかがえる。

なお、本單元では生徒各自が選択した新聞記事を題材としたが、学習後の感想に「新聞記事をこんなに深く読むのは初めてだった。」「記事を読んで理解できたからよかった。」「テレビ・ラジオ欄しか見なかったけど、おもしろいことが書いてあると思った。」などがあり、新聞への関心が高くなったようである。また、最初の記事選定の段階で、皆が同感してしまうような記事よりも、ある程度賛否が分かれたり疑問や反発を感じたりする内容の記事を選択させた方が活発に意見交換がなされることが分かった。

2 小説の読解指導との関連で、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫

1. 単元名 小説を読み、自分の思いや考えを表現する。（「国語Ⅰ」，「国語Ⅱ」）

*研究授業は、第1学年「国語Ⅰ」で実施。

2. 教材名 三浦哲郎『春愁』

3. 単元の目標

- ① 文章を読み味わうことを通して自分の思いや考えを深め、進んで表現しようとする。
- ② 思いや考えを適切に表現できるよう、工夫して話したり書いたりすることができる。
- ③ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうことができる。
- ④ 文章の組立てや語句の働きを理解し、自分の表現に役立てることができる。

4. 単元設定の理由

生徒たちの多くは表現すべき自己というものをうまく把握できずにいる。このとき、様々な人物、情景、心情が書き表されている文学的文章によって具体的な場면을提示されれば、生徒はその状況に自身を置いたときの自分の思いや考えに気づき、登場人物との対比から自己を表現するきっかけをつかむことができると考えた。

生徒は読解の深さに応じて、文学的文章に書き表された人物や情景、心情に、共感や疑問、反発をもつ。本研究では特にその疑問、反発に着目した。文章中の人物やその心情などに対して疑問や反発を抱くとき、生徒は登場人物とは異なる自分の思いや考え、生き方などに気付くことができると考えたのである。更にそこから自己評価によって考えを深めることによって、生徒は表現すべき自己を見いだすのである。また、自分がある立場に立って思いや考えを表明した場合、他の立場に立つ生徒からの疑問や反論が予想される。この他者との違いからも生徒は自分の思いや考えの特色を知ることができるだろう。こうした自己評価や相互評価を、自分の思いや考えを深め、表現するために、有効に活用することをねらいとした。

さらに、本単元においては、登場人物との対比により自分の思いや考えを文章化した後、それを客観的に評価する学習活動を設定した。このように自分の文章の内容を客観的に見直すことで、生徒は登場人物から離れて、自己を表現することができるようになると思った。

教材の『春愁』には、親友と同じ娘を好きになってしまう高校生が描かれている。主人公の由良はサッカー部のチームメイトで親友である藤尾との関係を保つことと、二人が好意をもつ女子学生奈緒への想いとの間揺れる。こうした青年期にありがちな悩みに直面する登場人物たちの姿は生徒たちの切実な関心につながると期待できる。

また、本単元では文学的文章の読解を表現力の育成に結び付けるために、あえて教材を段階的に提示しながら人物の心情を想像するという活動を繰り返し行なった。同時に、その想像を踏まえて、自己の思いや考えがどのようなものであるかを表現することをねらいとした。このことで、生徒は既に読みとった内容をより深く理解することも可能となり、何より想像を豊かにふくらませることを通して、自分の思いや考えの特色に気づき、自己をより豊かに表現するきっかけをつかむことができると考えた。なお、本単元で用いた、疑問や反発を自己を表現することのきっかけとする方法は、後述のように他の様々な文学的文章においても活用できるものである。したがって、本単元は生徒が『春愁』という教材を離れても、自己を表現する方法を意識できるようになることを意図して設定している。

7. 本時の指導（4 / 5）

(1) 本時のねらい

- ① 叙述を基に主人公の人物像を想像し、人間のもついろいろな要素を考える。
- ② 自分自身の書いた手紙を基に自己の人物像について考え、それを表現する。

(2) 本時の学習の流れ

主な学習指導（□教師，□生徒）	教師の指導・援助（○留意点，◆評価）
<p>1</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">前時までの学習から，由良の人物像について振り返らせる。</div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>2</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">本文を最後まで読み，奈緒の告白の場面における由良の言動を読み取る。</div>	<p>○ 前時のロールプレイングの内容を例示しながら，一人の人間の人物像を考えるときには，様々な視点やとらえ方があったことを確認する。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">自分について文章に書き表してみよう。</div>	
<p>3</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">「由良をどのような人間だと思うか」改めて考える。</div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>4</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">数名を指名して発表させる。</div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>5</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">登場人物に宛てて書いた手紙を読み返し，「このような手紙を書いた自分はどんな人間だと思うか」をワークシートに書く。</div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>6</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">本時のまとめと次時の予告</div>	<p>○ 以前に想像した由良の行動や態度と，本文中の由良の言動とを比較し，由良のもつ人間としてのいろいろな要素を考えさせる。</p> <p>◆ 由良の人物像を多様な視点からとらえることができたか。</p> <p>○ 由良の人物像を考えたときの視点や方法を参考にさせる。</p> <p>◆ 自己の人物像をとらえるための視点を見つけることができたか。</p> <p>◆ 自己についての肯定的な観点や前向きな観点があるか。</p> <p>○ ワークシートは集め，次時まで助言を付して返却する。</p> <p>○ プライバシー保護の観点から，ワークシートを他の生徒が見ることのないよう十分に配慮する。</p>

(3) 評価の観点

- ① 自分の思いや考えを進んで表現しようとしていたか。
- ② 自己の人物像をとらえるための視点を見つけることができたか。

8. 生徒の学習状況

(1) グループAの事例（ロールプレイング）

奈緒の告白の場面に藤尾が登場し、「何をしてるんだ？」と二人に問う場面を設定した。生徒の理解の一過程として、具体的な場面に自身を置いた想像によって状況をつかむことを目指したものである。今回の実践においてロールプレイングには「音声言語による表現」と「相互評価」という二つの目的があった。「音声言語による表現」については、場面設定がはっきりしており、また感情移入のしやすい内容だったため、下記のような自然な展開が可能になった。生徒Pは由良の行動を想像させる時点では「藤尾に奈緒を譲り、サッカーをとる」と考えていたが、ロールプレイングではまったく別の発言をしている。Pは事後に、「いきがかりでR（藤尾役）にひどいことを言ってしまったが、人間関係を悪くしたと思う。」と自分の表現方法の不適切さとその結果に気付く発言をしていた。

由良=生徒P 奈緒=生徒Q 藤尾=生徒R
由良「それならその人に…何も僕なんかを。」
奈緒「だから今その人に…」
藤尾「おい、そこで何してるんだ？」
由良「何って、たまたまそこで会ってさ。」
藤尾「お前、宿舎にいるんじゃないのかよ。なんで二人で会ってんだよ。」
由良「あれ、言わなかったっけ？」
奈緒「ちょっと待ってください。今、由良さんと大事な話をしていたんです。」
藤尾「何それ、俺が聞いちゃダメなの？」
奈緒「あの…藤尾さんの気持ちは嬉しいんだけど、私、由良さんのことが好きなんです。」
藤尾「ああ、そうなの？ で、由良はどうなんだよ。奈緒のことどう思ってんだよ。」
由良「好きだよ。」
藤尾「なんだよそれ、いつからだよ。」
由良「何でそんなことお前に言わなきゃいけないんだよ。」

(2) 生徒Bの事例

Bは最初、由良の人物像を想像するにも単語を羅列する程度で、由良と自分との比較も、一部共通点を見出すだけで全体として違いをはっきりとつかむことができずにいた。そのため、由良の立場に立って手紙を書くことができなかったのだが、そのことで、自分について考えてみるという段階に入ると、手紙を書けなかった理由を見つめ、今だったらどのような手紙を書くかという視点から、自らを省みる機会をもつことができた。ここでは、まだ、十分に自己を表現するところまでは達しなかったが、これを手がかりにして、繰り返し「自分について」考えることができるようになった。

(1) 奈緒の告白までを読んだ時点

- ① 由良はどんな人だと思うか→「弱気、恥ずかしがりや、生真面目。」
- ② 由良はどうすると思うか→「恥ずかしがりやなので、いったん別れてから考える。」
- ③ 自分ならどうするか→「何とか話す。または、自分がまだ好きかどうか、いったん別れて考える。」
- ④ 由良と自分の比較→「二人とも恥ずかしがりや、でも、あとは自分でもよく分からない。」

(2) 登場人物に手紙を書く時点

手紙を書くことはできなかった。

(3) 「自分について考えてみよう」でワークシートに記述した内容

「書いたとしたら、サッカーの方が、大事だからだめだ、と書いたと思う。僕は一度に二つのことはできない。自分は中途半端は大嫌いだから。もう一つ、手紙を書きたくなかったのは、何となくむかついたからだ。恋とか、そういうのって、どうせ遅かれ早かれ別れることがほとんどだし、別れるまでの間、だいたいその相手の人のために過ごした時間は無駄な気がする。」

(3) 生徒Cの事例

Cは藤尾の告白を聞いた由良の心情を想像する段階から、由良の人物像について「いいヤツ」と肯定的に評価し、反対に自分については「逃げるずるい人」と繰り返し述べている。しかし、何度も由良と自分を対比して考えて行く中で、自分のことを単なる「逃げるずるい人」として否定的にとらえるだけでなく、真剣に悩んでいく中でどうしようもなくなり「逃げてしまう」ことに気づき、それをありのままの自分として認め、表現し始めていった。

(1) 奈緒の告白までを読んだ時点

① 由良はどんな人だと思うか→「少し消極的な彼。でもいいヤツ。友だち思い。外に気持ちを出さない人。」

② 由良はどう思うと思うか→「奈緒のことは好きだが、藤尾のことを考えてとても口にはできず、もどかしい。奈緒には気のない態度をとって、自分の気持ちをごまかし、藤尾のことを薦める。藤尾には自分の気持ちにうそもつけないし話すこともできない。」

③ 自分ならどうするか→「奈緒にも藤尾にも前と変わらない態度をとって一人で悩む。」

④ 由良と自分の比較→「由良は自分を外に出すのがへたな人。」「自分は誰も傷つけないから逃げるずるい人。自分は由良より強いから人前で態度を変えないことができる。」

(2) 登場人物に手紙を書く時点

「私もあなたを好きだが、親友は自分の気持ちを知らない。親友のことを大切にしたいし、傷つけない。前に一度親友からあなたを好きなことを聞いて、あきらめたつもりだった。今はきっぱりと気持ちを整理できないけど、いつかあなたのことを普通の友として見られるよう、がんばりたい。」

(3) 「自分について考えてみよう」でワークシートに記述した内容

「私は嫌な女だと思う。結局自分は逃げているだけだ。友だちも好きな人も両方だろうと思うのは。友だちを傷つけてまで好きな人をとる勇気もないし、好きな人を友だちに譲るなんていう心の広さもなさそうだ。嫌なことに正面からぶつかれない私は、まだまだ子供だと思う。」(下線部は、机間指導での教師の助言後に記述。)

9. 考察

本指導事例においては、文学的文章に書き表された人物や情景、心情に対して生徒が抱く疑問や反発を生徒が自己を表現するきっかけとする指導法をとった。これは、共感したことを基に感想文を書かせる従来の学習指導では、生徒は叙述から読みとった内容をなぞるに止まり、自己を表現することが難しいという課題があるためである。高等学校の文学的文章教材には、読解の途中で生徒が疑問や反発を覚えるものが多い。そのような部分に着目させ、

自分の思いや考えを表現する学習活動を設定することで、生徒は自然に自己を表現することができた。

『春愁』においても、由良の反応、行動については疑問や反発を覚える生徒が多く、「それとは違う自分」を把握しやすかったようである。具体的な場面が与えられ、その状況を理解していれば生徒は容易に学習活動に取り組むことができた。さらに、由良という対象があることで、生徒は自分自身を見つめ考えるための起点を明確につかむことができた。由良という人物像を繰り返し考え直すことが、それとの対比において自分自身の考え方の特性を見つめ直す上で、生徒の助けになっていたと考える。

ただし、生徒間で意見を交換する相互評価については工夫を必要とした。今回の実践ではロールプレイングを中心に相互評価を行おうとしたが、他の生徒に対して感じている疑問や反発、あるいは自分自身の意見を生徒がしっかり把握できないままに、先へと進んでしまうケースが見られた。この際、ワークシートに自分の意見、相手への疑問や反論などを書きとめておくといった準備をした上でロールプレイングに入った場合には、他者への反論などを明確にして臨むことができ、相手の意見を評価しつつ自分の意見を深めるという当初の目標が確実に達成できたと考える。

最後に行った「自分について考えてみよう」では、それまでに繰り返し考えてきた由良と自分との比較から「自分自身」を第三者として見つめ直すことを目的とした。由良の言動から、「由良はどんな人」と問い続けたり、クラスの中で意見を交換したりすることで読みも深くなっており、その分、自分についても何を手がかりに考えればよいのか理解されていた。登場人物との対比で自己評価が行われていたのである。ただし、この学習活動では、登場人物の言動からより深く心情を把握することが重要であるため、生徒の読解の深さに応じたワークシートを準備するなどの配慮が必要であった。

本指導事例では、生徒が普段は内に秘めている自分の思いや考え、あるいは文学的文章を読む際に感じる様々な思いや考えに、いかに光を当て自己を表現することに役立てるかを考えてきた。このような思いや考えは、意識の内であって、生徒自身も十分に認識していない、いわばブラックボックスに入っているものである。本単元の学習指導では、ロールプレイングや手紙を書く学習活動を通して、様々な立場の人物や意見と自己とを引き比べつつ、少しずつブラックボックスが開かれていく体験を生徒自身にさせることができたと考察する。生徒が普段は意識していない自分の思いや考えに着目させることが、自己を表現する上で自分について「何を表現すればいいのかわからない」ということへの助けになると考える。

なお、本単元の指導法については、干刈あがた『プラネタリウム』、鷺沢萌『卒業』、井上ひさし『あくる朝の蟬』など、他のいくつかの教材についても実践を行った。その一つの郷静子『れくいえむ』では、一つの事件をめぐる三人の登場人物の立場が明確に描かれている場面に注目し、自分の思いや考えを投影しやすい人物を選び、自己を表現することができた。文学的文章において、疑問や反発を抱きやすい場面に注目すれば、どのような教材でも自己を表現することに結び付け得ると考える。

今後は、本指導事例における基本的な考え方を、論説文などの説明的文章教材に応用した指導実践を行いたい。

3 古典の学習を通して、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫

1. 単元名 和歌を鑑賞して思ったことや考えたことを、相手に分かりやすく伝える。

(「国語Ⅱ」「古典Ⅰ」「古典Ⅱ」「古典講読」)*研究授業は、第2学年「古典Ⅰ」で実施。

2. 教材 和歌(教科書教材から選択)

3. 単元の目標

- ① 繰り返し音読したり情景や心情を想像したりすることを通して、和歌に親しもうとする。
- ② 和歌の鑑賞を通して、思ったことや考えたことを自分なりに方法を工夫して表現することができる。
- ③ 和歌に詠まれた情景や心情を、想像力を働かせながら読み味わうことができる。
- ④ 古語の意味・用法を辞書を利用して調べることができる。

4. 単元設定の理由

自己を表現するためには、まず表現すべき内容をもつことが必要となる。しかし、高校生の中には、表現すべき内容を容易に見つけられない生徒が多い。そこで、本研究においては「主題解明の方法」に示したように、話や文章に表現されている思いや考えと、自分のそれとを対比することを、自己を表現するための手がかりとする指導方法を取り入れた。

古典には、作られた時代や環境の違いによって異なる、当時の人々の様々な思いやものの見方、考え方が表れており、それらを学ばせることは、生徒の心情を豊かにする上で大切なことである。その学習過程において、生徒が抱いた共感や反発、疑問が、表現意欲を喚起することにつながると考える。

「言語により自己を豊かに表現する」という観点から古典文学を振り返ってみると、万葉の古代から、自己の思いを短い言葉に託した短詩型文学としての和歌が想起される。当時和歌は人々の生活に根差し、自己の思いを伝達する重要な手段であった。和歌には、時代の制約を受けて現代の高校生には理解しにくいものもあり、生徒はそれらに近現代の文章を読むときよりも多くの疑問や反発を感じるであろう。また、恋の嘆きや別れの悲しみを詠んだ和歌などには、時代の違いを越えて共感をもつ生徒も多い。そういう点で和歌は共感や反発、疑問から生徒自身が豊かに想像をふくらませ、さらに自己を表現することに発展させることが期待できる教材である。

そこで、本指導事例においては、このような和歌の教材としての特性を生かし、まず生徒の表現意欲を喚起することを目指した。そしてその喚起された表現意欲を実際に表現していく過程で、古典の時代に生きた人と現代に生きる自分とを対比することにより、自己を見つめ直し、自らの思いや考えを豊かに表現していくことができるよう指導計画を立案した。

従来古典を扱う授業においては、内容が「表現」よりも「理解」に偏りがちであり、教師の一方的な講義形式となりやすい傾向にあった。さらに文法指導や現代語訳を重視するあまり、生徒の古典学習に対する興味・関心を失わせることもあった。そこで、現代語訳を提示してから鑑賞するといった指導方法を避けて、和歌から直接想像をふくらませる学習や、ポスターセッションを行い、言語によって自己を表現しようとする意欲を育てることに重点を置いた単元を設定した。

5. 主な学習活動の概要（5時間扱い）

(1) 第1次（1時間）

- ① 和歌のもつリズムや調べの美しさを感じながら繰り返し音読し、各自好きな一首を選ぶ
- ② 同じ和歌を選択した生徒同士ができるだけ一緒にならないようにグループを作る。（1グループは4人程度）

— A～Jの10首を教材として選択した場合 —

1班	2班	3班	4班
Aを選択	Bを選択	Aを選択	Cを選択
Bを選択	C	D	D
Cを選択	F	E	F
Dを選択	G	H	G
		

・このようにそれぞれが異なる和歌を選択した者がグループになるように調整する。
 （第3次では、同様に同じ和歌を選択した者同士を集めて「同首グループ」を作る。）

(2) 第2次（2時間）

- ① 選んだ和歌について、ワークシート a（p.23参照）を用い、各自が辞書で語句の意味について調べる。（ワークシートは、活用語の理解など生徒の実態を考慮して作成。）
 どのような状況下のどのような心情を詠んだものかを想像してワークシート a に記入する。

— グループ内ポスターセッション —

説明者

ワークシート

聞き手

聞き手

ワークシート

聞き手

- ・説明者は自分のワークシート a を見せながら、調べたことや鑑賞、意見を説明する。
- ・他の3人はワークシート b にそれぞれが聞いたことを記入し、説明者に対して反論や疑問を投げかける。
- ・1人7分程度で全員が順番に説明する。

- ② 担当の和歌について、ワークシート a をポスターとし、グループ内ポスターセッションを行い、発表し合う。自分の和歌を朗読してから発表するように指示する。説明者以外の生徒は、ワークシート b（p.23参照）に聞き取った内容や発言した感想・意見を記入する。

(3) 第3次（2時間）

- ① 前時までの学習を通じて見つめ直した自己の考えや思い起こされた体験などを「私の作品」として文章または詩歌により表現する。（ワークシート a または原稿用紙に書く。）
- ② 同じ和歌を選んだもの同士の「同首グループ」を作り、クラス全体でポスターセッションを行い、前時に書いた「私の作品」を読み合い、感想や意見を交換する。【本時 5/5】

6. 指導の工夫

- (1) 教材選定に当たっては、「生徒の体験に結び付きやすい和歌」「想像をふくらませやすい和歌」という二点に留意し、和歌によって喚起された自己の体験、思いや考えなどを表現させた。

—— 選択した和歌の例 ——

・五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする	(読み人知らず)
・玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶことの弱りもぞする	(式子内親王)
・父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる	(防人歌)
・ねがはくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ	(西行法師)
・いま来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな	(素性法師)
・夕暮は雲のはたてにもものぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて	(読み人知らず)
・世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば	(山上憶良)
・黒髪の乱れも知らずうちふせばまづかきやりし人ぞ恋しき	(和泉式部)
・世の中にさらぬ別れのなくもがな千世もとなげく人の子のため	(在原業平)
* 生徒の実情に合わせて和歌を選択する。(a校b校では6首, c校では12首を選択)	

- (2) 現代語訳や文法指導を行わず、代わりに一語ずつ辞書を引いて調べる学習活動を設定し、調べたことを基に想像を働かせて和歌の情景や心情を考えさせたこと。
* 古典学習に苦手意識をもつ生徒には、ワークシートaに調べるべき言葉(活用語は終止形)や情景、心情等を考える上で着目したい点などを記入しておいた。
- (3) グループ及び全体でのポスターセッションの学習活動を設定した。本單元におけるポスターセッションは、下図のように、説明者の生徒が自分のコーナーでワークシートを資料として提示しながら説明し、聞き手の生徒は説明を聞いて質問をしたり感想を言ったりしていく学習活動である。この学習活動には生徒が音声表現と文字表現とを自由に組み合わせて表現できる利点がある。

—— ポスターセッション (クラス全体) ——

<ul style="list-style-type: none"> ・「同首グループ」を説明者と聞き手の二つに分ける。 ・説明者は各持ち場で、自分のワークシートaと自分の作品について聞き手に説明する。 ・聞き手は任意の説明者を訪れ、説明を聞き、質問や意見を述べる。 ・途中で、説明者と聞き手の役割を交替する。 (全員が説明者と聞き手の両方になる。) <p style="text-align: center;">----- 留意点 -----</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最低3か所を訪れるように指示する。 ・意見交換が活発に行われない場合には、質問内容を板書して例示する。(「和歌の作者と説明者との共通点や相違点について」「選んだ和歌と表現した作品との関連について」など。) 	<p>○説明者 ●聞き手</p>
---	-----------------------

7. 本時の指導（5 / 5）

(1) 本時のねらい

- ① 和歌を鑑賞して思ったことや考えたことを、文章と説明とで分かりやすく相手に伝えることができる。
- ② 相手の発表を聞いて理解し、それについて自分の意見をもつことができる。

(2) 本時の学習の流れ

主な学習活動（□教師 □生徒）	教師の指導・援助（○留意点 ◆評価）
<p>1</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">和歌を音読する。</div>	<p>○ 前時までに学習した和歌の内容を思い出しながら音読するように指示する。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">ポスターセッションで自分の思いや考えを発表しよう。</div>	
<p>2</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">「同首グループ」の中でお互いのワークシートaの共通点や相違点を確認し合う。</div>	<p>○ 自分が調べたことで不安な点があったらこの場で確認するように指示する。</p>
<p>3</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">ポスターセッションの形式で、ワークシートaと「私の作品」について発表するよう指示する。</div>	<p>○ 説明者は、自分なりに朗読してから説明に入るように指示する。（5分程度）</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">説明者は担当した和歌と「私の作品」について説明する。</div>	<p>◆ 「私の作品」とその場の説明を適切に組み合わせるよう内容を伝えようとしているか。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">聞き手は説明されたことに対する意見や疑問を説明者に伝え、回答を得る。</div>	<p>○ 時間内（約15分）に最低3か所を訪れるように指示する。（約15分で説明者と聞き手が交代する。）</p> <p>◆ 自分の意見を持ち、質問することができたか。</p>
<p>4</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">自分のワークシートaや「私の作品」を見直して加筆、修正する。</div>	<p>○ ポスターセッションの中で気付いたことをワークシートや「私の作品」に加筆、修正するよう指示する。</p>
<p>5</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">本時のまとめと今後の学習について</div>	<p>○ 加筆や修正の部分は、他の生徒には発表しないので、思ったことや考えを自由に記述するように指示する。</p>

(3) 評価の観点

- ① 自分の体験、思いや考えを相手に伝えることができたか。
- ② 相手の発表を聞いて質問したり、自分の意見をもつことができたか。

8. 生徒の学習状況

自己を表現することの苦手な生徒が、2度のポスターセッションで、和歌に表れた心情と自分の思いや考えとの共通点や相違点を認識し、それらを自分なりに書き表すことができた。

— 生徒Aの事例……世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば —

○ 第2次 想像力を働かせて作歌の背景・心情を読みとる学習活動で記入した内容

「この作者は、今生きている世の中に不満があり、そこから抜け出したい。情けなく、肩身がせまい世の中がとてつらい。鳥を見ていていいなあとと思う。そういうわけの分からない世の中とは関係なく、空を自由に飛ぶ鳥はいいなあとと思う。自分も鳥になりたい…この世の中から抜け出したい。でも自分は人間なので鳥にはなれないんだという現実気づく。さみしいなあ…。」

↓（この生徒が、グループ内ポスターセッションの中で、作者との共通点について、認識した後の作品。）

○ 第3次 和歌を通じて考えたことを自分の言葉で表現する学習活動で記入した内容

「山上憶良さん、はじめまして。先日私はあなたの歌を読み、とても共感しました。あなたの気持ちはとてもよく分かります。私も常日頃そう思っています。私は今高校生で毎日まじめに学校へ通ってわけの分からない授業を聞いてます。ときどきこのままでいいのかなあとと思います。私には夢があります。早くその夢一本で生きたいです。授業なんて意味ない…と思います。でも、どうでしょう。本当にそれでいいのでしょうか。こんな、未熟な考え方で世の中に出ても夢は叶えられません。だから私は今を精一杯生きようと思います。辛くても平気です。私には夢があります。何より強い味方です。私はこんな自分に生まれたことを誇りに思います。」

*事後の感想：「作者のようになりたいけれど、かといって自分がどうなりたいかが分からなかった。しかし『作者への手紙』を考えているうちに、はっきりしてきた。」

— 生徒Bの事例……玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶことの弱りもぞする —

○ 第3次 ワークシートbの「意見・感想」欄に記入した内容と事後に加筆した内容

生徒Bは、ポスターセッションで説明を聞くうちに、この歌に興味をもち始めた。

「この歌は私が学校にいるときと同じ気持ち。こういう恋はしてないけど、友達がいないときの寂しさはこんな感じで、どうしようもない感じ。」

↓（この生徒が、ポスターセッションの後で加筆した部分の抜粋。）

私の周りには、昔、いろんな人がたくさんいたから、イヤなことがあっても乗り越えることができました。でも今は、一人であることがすごく多くなり、一人でこれからやっていかなければいけないとは思いますが、耐えられないときがあります。基本的に一人であるのは嫌いです。友達が学校に来ているか、毎朝不安になります。「今日行って一人だったらイヤだなあ。休んじゃおうかな。遅刻しちゃおうかな。早退しちゃおうかな。」そんなことで頭がいつもいっぱいです。そして、いっそのこと学校やめてしまおうかという気持ちになることもあります。

ワークシート a (*は、生徒の実態に応じて加除)

③ どのような人がどんな状況で何を思いながら詠んだ歌だろうか。想像力を働かせて考えよう。	② 「天つ空なる人」とは、どのような人のことだろう。*	① 語句			夕暮れは 雲のはたてに ものぞ思ふ 天つ空なる 人を恋ふとて	ワークシート a 組番 氏名	
		とて	天つ空	もの思ふ			はたて
				ぞ			に

ワークシート b

③ 感想・意見	② どのような歌か。	① 和歌	ワークシート b	組番 氏名

9. 考察

古典の授業は、どうしても講義形式になり、現代語訳や文法、文学史の説明に主眼が置かれてしまうことがある。そこで本単元では、まず自分で辞書を引いて一語一語の意味を調べながら想像をふくらませ、自由な発想で和歌を読み取ることとした。現代語訳をしないことには、生徒にも教師にも不安がなかったわけではない。しかし不安ながらも自分で調べていくうちに、生徒は生き生きと楽しそうに想像をふくらませ、解釈には幅があること、短詩型文学はおもしろいこと、さらには一語一語の大切さや意味の深さに気付くところまで至った。このことは、研究授業を行ったいずれの学校でも同様の学習活動が見られ、逐語訳や綿密な文法指導がなくても、内容の理解が可能であることが明らかになった。

また、豊かに自己を表現するようになるためには、自己の内面を見つめるとともに、相互評価や自己評価を積み重ね、次第に深められた自己を表出していく必要がある。本研究はその点に重点を置き、ポスターセッションや、感じたことを「私の作品」として提示することで、見つめ直した自己を意識化させ表現させた。ポスターセッションの形式は、文字言語による表現と音声言語による表現の組み合わせが自由にでき、生徒には好評であった。なお、グループでの話し合いをスムーズにするためには司会者をおき、進行メモを作成するという方法が考えられる。

和歌の背景や心情を読み取り、次に「私の作品」に発展させる学習活動においては、和歌に描かれた心情に自分を置いたことがないという声も聞かれたが、生徒は授業を重ねるうちに、「作者」に照らし合わせた自己の在り方を考え、次第に自分の表現したいものや「表現すべき自己」が見えてきた。生徒の中には「普段自分の気持ちや体験を人に発表する機会はあまりないので、難しかった。」という感想をもつ者もいたが、だからこそこのような授業は必要であろう。一首について深く考えたことが、生涯にわたり、古典に親しむ態度を育てる契機ともなると考える。今回は和歌を教材として実践したが、他の長文の古典についても人物の心情や情景が、端的に表れている部分をとらえ、本事例と同様の方法で学習活動が設定できると考えるが、このことについては今後の課題である。

IV まとめと今後の課題

1 研究のまとめ

言語により豊かに自己を表現する力を育成するためには、生徒が、認識や伝達の基本である言語の力を再認識し、表現する内容や表現する方法を主体的な学習活動を通じて自ら見いだしていくことが重要である。本研究においては、自己を表現する内容を、事物に対したときの自分の思いや考えとしてとらえるとともに、多様な表現方法を提示して、生徒が自分に合った表現方法を選択できるよう指導法を工夫した。

「『付箋ディベート』により、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫」では、生徒各自が選んだ新聞記事を教材とし、「付箋ディベート」の学習活動を設定することによって、自分の思いや考えを的確に相手に伝えることの楽しさと難しさを実感させることができた。生徒は、単純化された画一的な表現では自分の本当の思いや考えが相手に伝わらないことを体験的に理解し、自分の考えを筋道立てて表現する方法を段階的に学習していった。

「小説の読解指導との関連で、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫」では、登場人物との対比で自分自身について表現した後、さらにそこから考えを深めて自己を表現する学習活動を設定した。生徒にとって身近で切実な題材を提示し、その状況に自分自身を置いたときの思いや考えを表現することを通して自己を見つめ直させることで、生徒が自己を表現することに積極的に取り組む姿勢が見られるようになった。

「古典の学習を通して、豊かに自己を表現する力を育てる指導の工夫」では、生徒が親しみを覚えやすい和歌や想像をふくらませやすい和歌を教材とし、それらを通して自分の思いや考えを表現する授業を行った。従来と異なり現代語訳を行わないことで、生徒は和歌から直接的に想像をふくらませ、ポスターセッションで、他者の意見を聞く中で自己の考えを深めたり自由な発想を自分に適した方法で表現したりすることが可能になった。

いずれの指導事例においても、自分の思いや考えを表現したくなる場面を設定するためには生徒の疑問や反発に着目して指導計画を立案することが、表現活動に対して自信をもたせるためには学習活動を段階的に設定するとともに肯定的な観点で評価をすることが重要であることが明らかになった。また、表現の内容を豊かにしていくためには、文章から理解した内容についての自分の思いや考えを一度書き表してから、それを基に考えを深めていく方法が有効であった。

2 今後の課題

- (1) 「豊かに自己を表現する」ことの指導を年間指導計画の中でどのように位置付けるか。

表現するための内容を充実させつつ表現力の向上を目指すには、体系的、継続的な指導が欠かせない。したがって指導事項を系統化して長期的な指導計画を作成し、教育課程への位置付けについて研究する必要がある。

- (2) 生涯学習の観点から、豊かに自己を表現する力を育てる指導をどのように発展させるか。

教室という同年代の生徒同士の意見交換の場ではぐくまれた表現力が、社会の中で様々な場や相手に応じて効果的に活用されるためには、常にその場の状況や人間関係に配慮できる能力や態度を身に付けることが必要である。そのための指導の在り方について、研究を深めていくことが課題である。